

Title	昭和三十五年度秋季史學科見學旅行記
Sub Title	
Author	加藤, 佐和子(Kato, Sawako)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.2 (1961. 2) ,p.134(256)- 136(258)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

昭和三十五年度秋期史學科見學旅行記

本年度の史學科秋期見學旅行は、淺子、河北、米田、志水諸先生の指導のもとに約四十人が參加、十月三十日より四日間に亘り松江を中心に行われた。

第一日、松江に着いた翌日、この日は全員行動をともにした。まず市内の島根縣立博物館で折から催されていた「かな書道展」を見學した。陳列は古筆切をはじめとする各時代の代表的作品であつたが、そこで館員がして下さつた山陰の風土と松江人の性格についてのお話は、これからの見學のあり方を示唆して呉れたようで大變興味深かつた。續いて近くの松江城を見學した。取残されたように立つている天守閣は慶長當時の遺構。

北松江よりの一畑電鐵は宍道湖を右に見る美しい風景で、墨繪の様な湖と向いの山々、淺子先生が授業の折に話された農家の築地松が黒く四角い箱でも置いた様に點在するのも印象的だつた。

出雲大社は廣い境内に松も清らかで、伊勢神宮よりずつと明るく感じられた。宮司の千家尊宣氏から大社の歴史をお伺いし、出雲そばの御馳走にあずかつたのは嬉しかつた。毛利綱廣寄進の銅鳥居を入ると、新築された拜殿に張られた特色ある縄がまず眼にとまる。社の特別の御好意で八脚門の脇より瑞垣の内まで入つ

て參拜させて載いた。端麗な樓門の後に大國主命を祀る本殿が大きくそびえていた。大社造りとして有名な本殿は昔の四分ノ一に縮小されているとは云え、總高八〇尺、白木造で木割太く、その簡潔、壯大な姿には深い感銘を受けた。その他舊曆十月に全國から集う神々の宿所として左右に並ぶ十九社、宇迦之靈神を祀るといふ釜社等が珍らしかつた。

日御碕は、島根半島の西端にある。此處には素盞鳴命（上社）と天照大神（下社）とを祀る日御碕神社があり、ここでは古文書等を見學した。岬の先端には燈臺があり、そこから冬近い鉛色の日本海が眺められた。

第二日、美保關コース、大橋川に架かる松江大橋の側より小さな汽船に乗り中ノ海を東北に美保關へ向う。淺子、米田兩先生と學生約三十人參加した。始め心配された天氣も良くなり、島根半島、大根島、弓ヶ濱、その彼方に遠望される伯耆大山が美しい。美保關に着いて、直ちに晝食をとり、美保神社に參拜した。祭神は事代主神、美穗津姫神で、二棟の連なつた所謂美保造の社殿に祀られている。男木、女木の千木が緑の裏山に際立つて映り、美しい神社であつた。社前には諸手船神事に使う船や獨木舟より板船に變る過渡期の船があつた。

此處から東に約二百米歩き佛谷寺に行く。當寺には重文の藥師如來、聖觀音、菩薩形等五體の平安時代の佛像がある。とくに藥師如來坐像が面白く、各像何れも同時代の

作品で、刀法粗豪、表現また素樸でよく地方色を發揮している。續いて五本松を見學ののち、バスで歸路についた。

鰐淵寺コース、河北、志水兩先生指導のもと總勢十一名、九時ごろ宿を出て秋鹿までバス。朝のうちはどんよりしていた空も、やがて陽がのぞきはじめ、秋鹿驛に着いた時には、もうすっかり晴れ渡っていた。宍道湖は、いつばいに陽光を受け、雨のしとついていた昨日とは、うつつ變つた明るい感じであつた。

雲州平田を経て別所でバスを降り鰐淵寺まで約四キロの道程を歩いた。途中は前日の雨のため、すっかり道がぬかつており歩きのに随分苦勞した。

寺域には古木が生い茂り、門前には清らかな溪流の音が聞かれ、誠に古刹に相應しい環境である。一行は案内を乞い、坊に通されて寺の説明を聞いた。その後、「後醍醐天皇御願文」「名和長年執達狀」及び「毛利元就畫像」「一字金輪曼陀羅」などの寺寶を見せていた。此寺には他に「壬辰年銘觀世音菩薩立像」もあるが、残念ながら拜觀することが出来なかつた。

晝食後、根本中堂、銅鐘などを觀、最後に奥の院を訪れたが、これは十メートル程もある浮浪の瀧の背後にある。聳え立つ巖壁にかかる浮浪瀧の一郭は、修驗道の靈地にふさわしくいかにも神秘的であつた。

第三日、安來コース、淺子・米田兩先生と同行二十五人、汽車で民謡で有名な安來市に出た。この附近は昔から良質の鐵鋼の産

地として、また本土と隱岐を結ぶ港として榮えたところであつた。驛より直にバスで清水寺に向つた。

清水寺は、寺傳によれば、推古天皇のころ尊隆上人によつて開かれ教皇寺と號したが、大同年間に盛縁上人再興して瑞光山清水寺と改められた。のち永祿・天正の間兵燹にかかり、多數の堂宇を焼失して、現存の建物は戦火をまぬがれた室町時代の本堂(重文)、江戸時代の三重塔婆等である。本堂は七間七面の單層屋根入母屋造りの大建築であり、三重塔婆は安政年間の建築である。本堂には重文の十一面觀音像が安置されているが、これは祕佛になつている。念佛堂の阿彌陀三尊像は藤原末期のもので、兩脇侍は京都大原の三千院のものに等しく跪坐している。三尊いづれも藤原時代にふさわしい優美な姿態、流麗な衣文をあらわしている。また清水寺の塔頭蓮乘院には閑素な古門堂、巖松軒の兩席がある。

清水寺見學後、雲樹寺に到る。

當寺は、元亨二年、覺明孤峯禪師が、土豪牧新左衛門の助力により開創したもので、覺明は後醍醐天皇の寵遇を受け、「天長雲樹興聖禪寺」の勅額を賜つている。ここにはまた雲に乗り樂を奏する天女を浮彫にした美しい高麗朝の銅鐘があり、重要文化財に指定されている。大門は屋根切妻造本瓦葺四脚の小門で、大永年間の建築、構造が變つており、とくに冠木が虹梁狀をなし、珍しいものである。

第四日、松江市内コース。バスにてまず八重垣神社に行く。

當社は、素盞鳴尊、稻田姬を祀り、本殿は質素な大社造りで、内部の壁面には泥繪具で稻田姬をはじめ諸神像が描かれており、剝落が甚しいが、所々になお美しい色彩を残している。

神社の後方には、老杉鬱蒼たる所謂佐久佐の森があり、そのうちひっそり鎮まる鏡の池には、古い信仰の面影がうつさされているかのような幻覺をおぼえた。

こゝから約二軒で神魂神社に到る。ここは出雲國造の祖、天穗日命が創建したものと伝えられ、伊弉册・伊弉諾命を祀っている。天穗日命の子孫は靈龜二年出雲大社に移るまでここに奉仕していたといわれ、國造就任の際に行われる神火相續式、新嘗祭は明治初年に至るまで當社で續けられたという。

現在の本殿は正平元年に建造されたものであり、大社造り中最古の遺構である。この建築は屋根に反りが少なく、また床が比較的高いことなど大社造りの古制を保存したものだといえよう。このほか本殿の横手にある貴布禰稻荷神社は、二間社流造りの作例として注目すべきものである。

此處で、菅田庵行と、國分寺址行の二班に分かれて見學した。

菅田庵は寛政年間に松江藩主松平不昧公（治郷）が弟雪川と共に家老有澤式善號宗意の山莊に營んだ茶室で、幽邃の境茶亭またこれと和してまことに美しいものがある。

出雲國分寺址は昭和卅一年に發掘調査が行われて、その相貌があきらかにされた。すなわち南大門・金堂・講堂・僧坊を南北の

中軸線上に配し、金堂と講堂の間の東西に鐘樓・經藏をおき、また東に片寄せて七重塔を置いた所謂東大寺式伽藍配置を示している。そして南大門から所謂天平道路が眞直ぐ南に延び、その左右には整然たる條里制地割が認められるのである。ひととき私達はそれらの遺址が語りかける上代史に耳を傾けたのであつた。おわりに當りこの見學旅行のため種々お世話下さつた方々に厚く感謝の意を表する次第である。

(加藤佐和子)